

【調査報告】 高校生価値意識調査 2015 〈臨時版〉

将来展望は回復の兆し

「自分自身の将来」「社会人になるころの社会」ともに明るい上昇

池内摩耶 リクルート進学総研 研究員

本調査は2007年から実施しているが、昨年は“アベノミクスやオリンピックの影響を受け、景気回復への期待から、高校生の未来展望は回復の兆し”と報告した(188号)。

経済的にも好転の希望を感じる高校生が増え、「進学ブランド力調査」でも昨年は“東名阪全エリアで私学志向回復傾向”が見られた(188号)が、2015年の同調査においては“私立志向が強まる関東、国公立回帰の東海・関西”とエリアによる差が顕著な結果となった(194号)。社会的背景が、高校生の進学観をはじめ価値観に大きく影響を与えることはこれまでの調査結果から明らかである。そこで、スピード速く、激しく変化する社会情勢が高校生の価値観にどのような影響を与えているのかを最新で捉えるため、今回、「高校生価値意識調査」を臨時版として実施することとした。ここでは調査結果の中から、高校生の社会観・進学観・キャリア観・世代観・結婚観・家庭観について報告する。

調査概要	
<p>調査目的: 高校生の将来イメージ及び進路選択に対する価値意識を把握する。</p> <p>調査方法: インターネット調査</p> <p>調査対象: 2015年9月現在、高校1年生～高校3年生で、大学・短期大学・専門学校いずれかへの進学を検討している男女。株式会社マクロミルのモニター会員のうち、2015年9月時点の高校生を対象にスクリーニング調査を実施。</p> <p>※2009年～2014年は4月に調査を実施しているため、3月時点の高校生のうち、以下2条件いずれかの該当者を調査対象としている。</p>	<p>①調査年度4月時点において、高校2年生～高校3年生で、大学・短期大学・専門学校いずれかへの進学を検討している男女。</p> <p>②調査年度4月時点において、高校既卒者で高校在学中に大学・短期大学・専門学校いずれかへの進学を検討したことがある男女。</p> <p>調査期間: 2015年9月11日(金)～9月17日(木)</p> <p>集計サンプル数: 1437人</p> <p>※関東エリア、東海エリア、関西エリア、その他エリアそれぞれにおいて、文部科学省「平成26年度学校基本調査」から調査対象者の母集団の男女構成比を算出し、回収後の4エリア内の男女構成比をウェイトバック集計により、補正を行っている。</p>

高校生の社会観

引き続き、将来展望は回復傾向。景気は2014年から「変わらない」が6割。

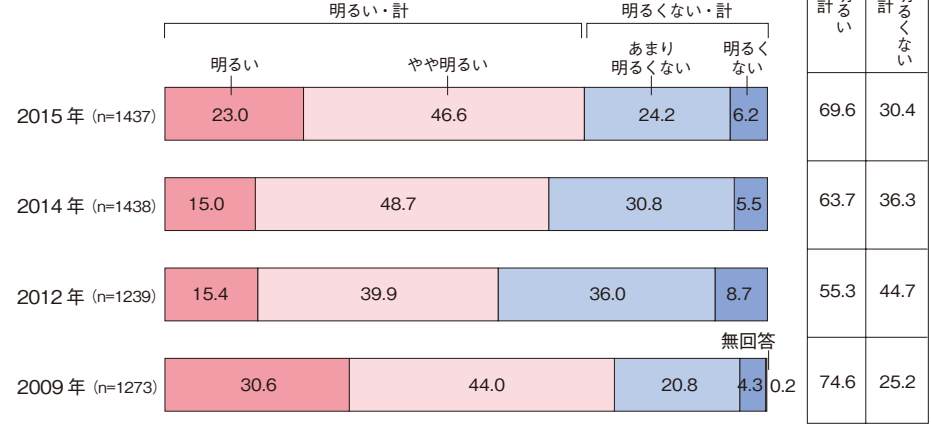
「自分の将来は明るい」と思う高校生が7割に上昇

高校生は“自分自身の将来”と“社会人になるころの社会”に希望を感じているのだろうか。2007年の調査開始から継続して聞いているこの2項目は、いずれも回復・増加基調にある。自分自身の将来に対しては70%が

「明るい」と回答(図表1)しており、2012年から増加傾向にある(2009年:75%→2012年:55%→2014年:64%→2015年:70%)。また、自分が社会人になるころの社会は「明るい」と回答した高校生は50%となり(図表2)、調査開始以降最高ポイントとなった(2009年:39%→2012年:31%→2014年:49%→2015年:50%)。理由として、ア

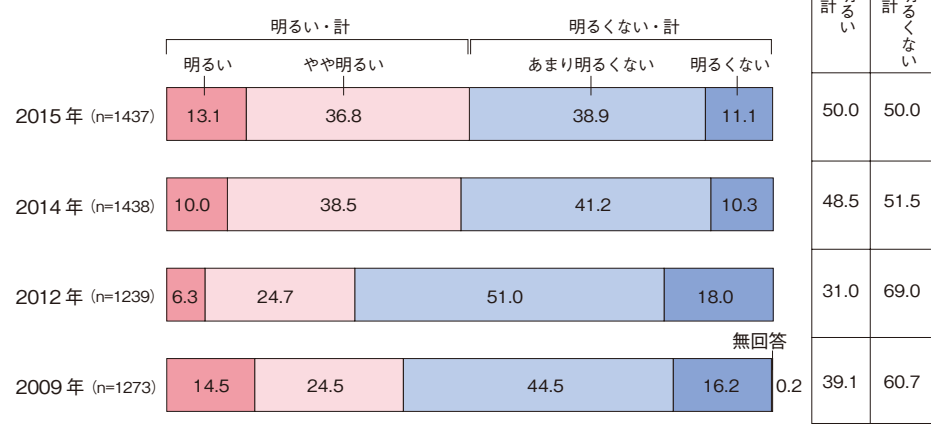
ベノミクスとオリンピックを挙げる声が多数聞かれ、将来に対して前向きな感情を抱く高校生の増加が見られた。一方「明るくない」と答えた高校生も、自分自身の将来で30%、社会人になるころの社会で50%存在し、少子高齢化などの社会不安の声も聞かれたが、全体的には将来への期待の高まりを感じる結果となった。

図表1 自分自身の将来は明るいか



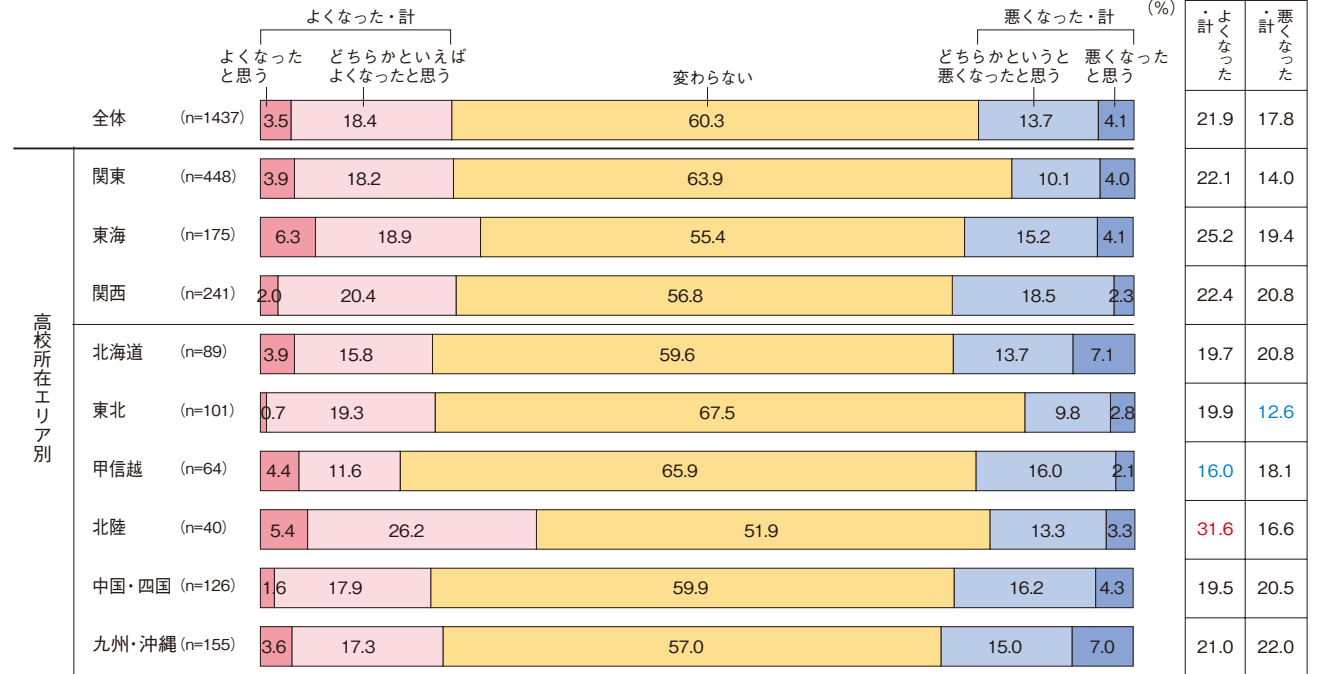
- **明るい**
 - ・ なりたいものがあり、目指すものがあり、それが目標として設定されている自分の将来は明るい
 - ・ 将来が明確に決まっているし、それを絶対に叶える意志は固まっているから
- **明るくない**
 - ・ 自分の将来が想像できないから。将来は景気が今よりもさらに悪くなるような気がするから
 - ・ 少子高齢化により若者はどんどん磨げられていくであろうから
 - ・ 不景気で、就職難だから

図表2 社会人になるころの社会は明るいか



- **明るい**
 - ・ 私が就職するときには東京オリンピックが開催され経済的にも社会的にも日本が活性化すると考えているから
 - ・ どんどん医療や経済は、従来の反省を活かしてよりよいものになってくれると信じているから
- **明るくない**
 - ・ アベノミクスだと言うのが本当に経済が立ち直るのか不安。少子高齢化でただでさえこれから大変
 - ・ 私が社会人になる頃の日本は今よりもっと高齢化社会になっていると思うので 働き手が少なく大変だと思う

図表3 2014年と比べて「景気」はよくなったか



100.0 「全体」より5ポイント以上高い 100.0 「全体」より5ポイント以上低い

「景気がよくなった」が最も高かったエリアは北陸

2014年4月、17年ぶりに消費税率が5%から8%に引き上げられた。その後、GDPマイナス成長が続き10%への増税時期が先送りされるなど景況感への不安を感じる一方、アベノミクスへの期待や外国人観光客の増加で、経済活性する業界・エリアに注目が集まるなど、2014年～2015年は景気の動向に振り回された1年だったのではないだろうか。

このように変化する景気の状態を、高校生はどのように捉えているのかを問うた(図表3)。「よくなった」と感じている高校生が22%と「悪くなった」18%を上回り、「変わらない」が6割であった。この1年で変化を感じている高校生は多くはないようだ。

しかしながら、エリア別では顕著に差が表れた。「よくなった」が「悪くなった」を上回ったのは、東名阪3エリアと東北・北陸であった。特に北陸は、「よくなった」が32%と全エ

リア内で最も高かった。これは北陸新幹線開通による、観光客の増加影響も少なからずあると考えられる。

東名阪3エリアを比較をした場合、仮説では関東のみ景気回復感を示すのではないかと考えたが、3エリアとも「よくなった」ポイントに大きな差はなかった。しかしながら、「悪くなった」が関東14%に対して、東海19%、関西21%と5ポイント以上の差となり、東海・関西は、関東と比べて景気後退感が視く結果となった。

高校生の進学観・キャリア観 「専門性」は求めるも、「可能性」「夢・挑戦」を抱く高校生が増加

進路検討、進学観、キャリア観にもポジティブな傾向

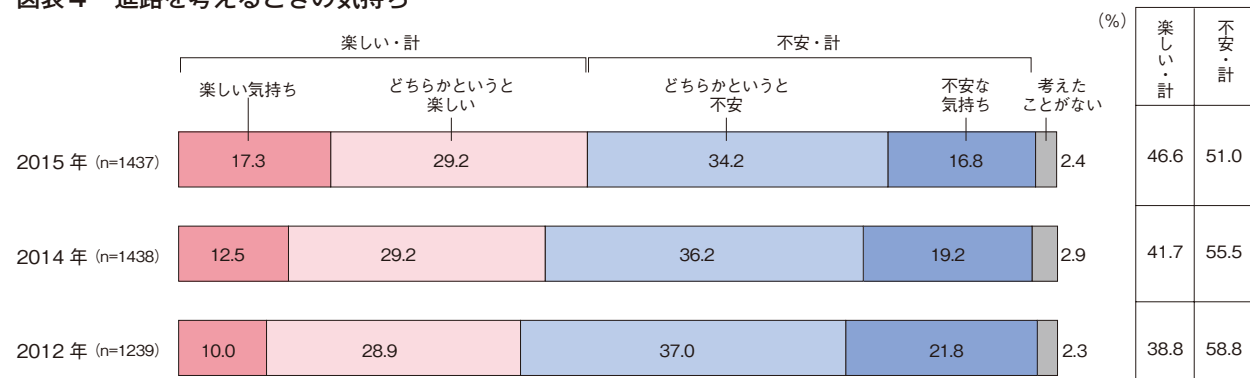
進路検討時の気持ちが「楽しい」と回答した高校生は、2012年から8ポイント上昇し、47%であった(図表4)。「不安」51%より下回るものの、自分自身の将来の明るさ上昇の影響もあり、進路に対してポジティブな気持ちで検討する高校生が増えているのは喜ばしいことである。

将来展望の回復傾向に伴い、自分の夢を持ち、新しいことにチャレンジできる働き方が復活傾向にある(図表5)。その一方、将来は手に職をつけて、収入や雇用の安定した生活を望む高校生も多い。

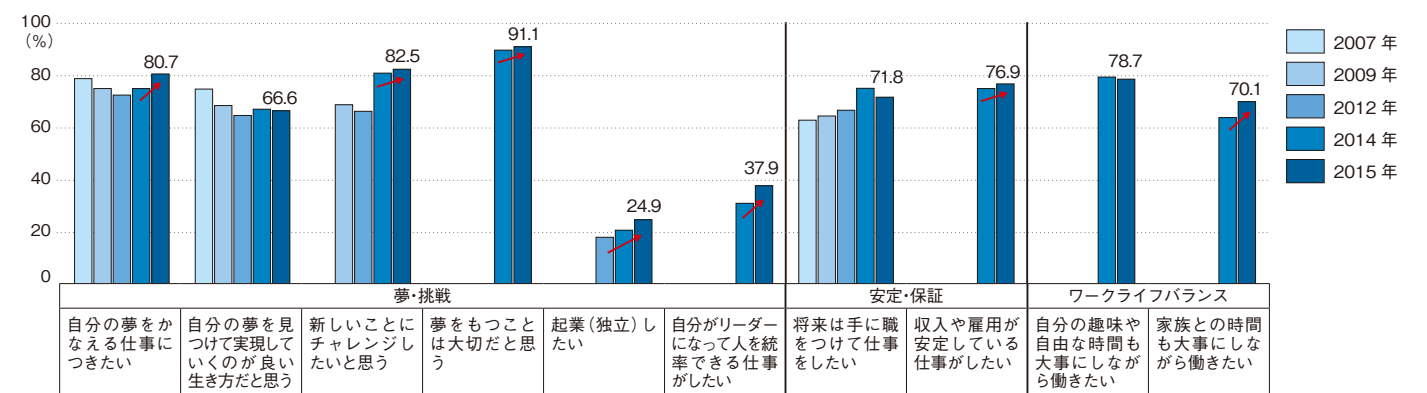
進学に対しては、「進学先で自分の得意分野を作りたい」、「勉強以外のことを幅広く学びたい」、「夢があれば学歴は関係ない」、「将来のことは進学してから考えたい」の項目が

2009年を底に上昇(図表6)。「専門性」を求める声は引き続き高いものの、「可能性」「夢・挑戦」を進学先で模索する流れが上昇してきている。仕事に対する「自分の夢」と「安定・保証」、進学に対する「可能性」「夢・挑戦」と「専門性」の関係性において、どちらかに偏るのではなく、自分の思いと“バランス”を取りながら思考・行動する傾向は、2014年調査結果から変わらない高校生の価値観である。

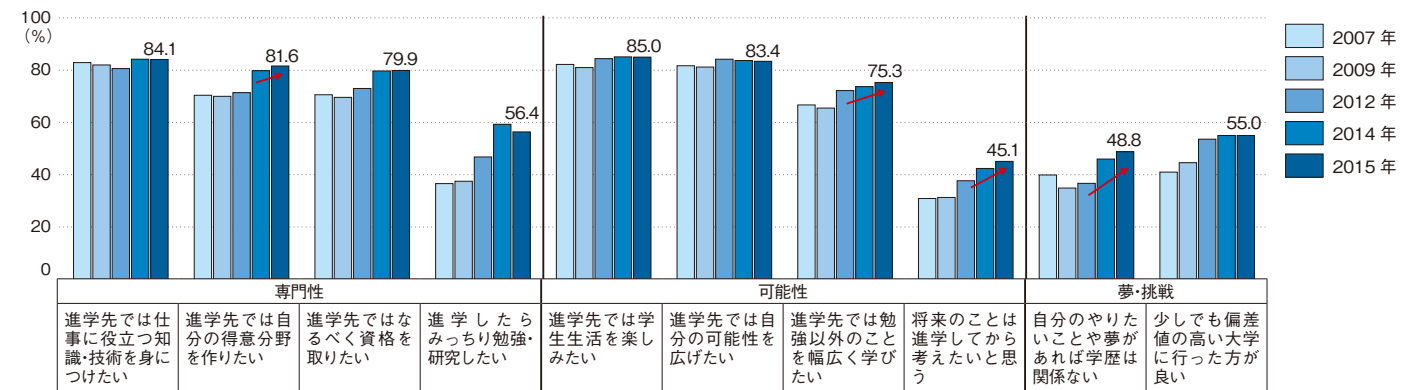
図表4 進路を考えたときの気持ち



図表5 仕事や働き方に対する考え(「あてはまる」と回答した割合)



図表6 進学に対する考え(「あてはまる」と回答した割合)



高校生の世代観 強みは「ITスキル」、弱みは主体性や実行力など「アクションする力」

SNSを通じたコミュニケーション・情報収集は得意

自分たち世代の『強み』は「ITスキ

ル」が上位を占め、自信を持っている様子がうかがえる(図表7)。

twitter, mixi等のSNSサービスと共に成長し、複数アカウントを使いこ

なすSNS世代。「SNSを通じたコミュニケーションや仲間づくりは得意」「新しいアプリはすぐ使いこなし、スマホを通じた情報収集や伝達力は高

図表7 自分たちの世代の『強み』と『弱み』(自由回答)

自分たちの世代ならではの『強み』				自分たちの世代ならではの『弱み』			
順位	強み	2015年 (%)	2014年 (%)	順位	弱み	2015年 (%)	2014年 (%)
1	インターネット・ネット	5.9	4.3	1	ゆとり・ゆとり教育・ゆとり教育世代	10.0	22.4
2	パソコン・携帯電話・デジタル・電子機器	5.5	3.3	2	コミュニケーション・会話が下手	6.0	3.2
3	IT・情報化社会	3.4	4.2	3	精神的な弱さ・根性がない・ストレスに弱い	4.7	4.7
4	若さ	2.7	2.4	4	諦めやすい・我慢できない・忍耐力	3.3	3.9
5	コミュニケーション・誰とでも話せる	2.5	-	5	自分の意思がない・流されやすい	2.9	-
6	発想力・独創性	2.3	2.7	6	社会的評価(認められない・馬鹿にされる)	2.7	2.5
7	自分の意思・自分らしさ	2.1	-	7	SNS・インターネット依存	2.7	-
8	脱ゆとり教育・新学習指導要領	2.0	2.3	8	言われた事しかやらない・指示待ち・自主性や主体性がない	2.6	2.3
	グローバル化・国際化	2.0	-	9	打たれ弱い	2.2	2.3
10	情報の収集力・伝達力	1.9	1.8	10	学力・学習不足・知識不足・頭が悪い	2.1	4.5
					意見を言えない・発言しない	2.1	-

い」などITスキルを『強み』とする声は2014年より増加しており、今後ますます増えていくだろう。

一方、『弱み』のトップは2014年に引き続き「ゆとり教育」だが、ゆとり教育と呼ばれた学習指導要領が終了したことから、昨年と比較するとポイントは半減している。

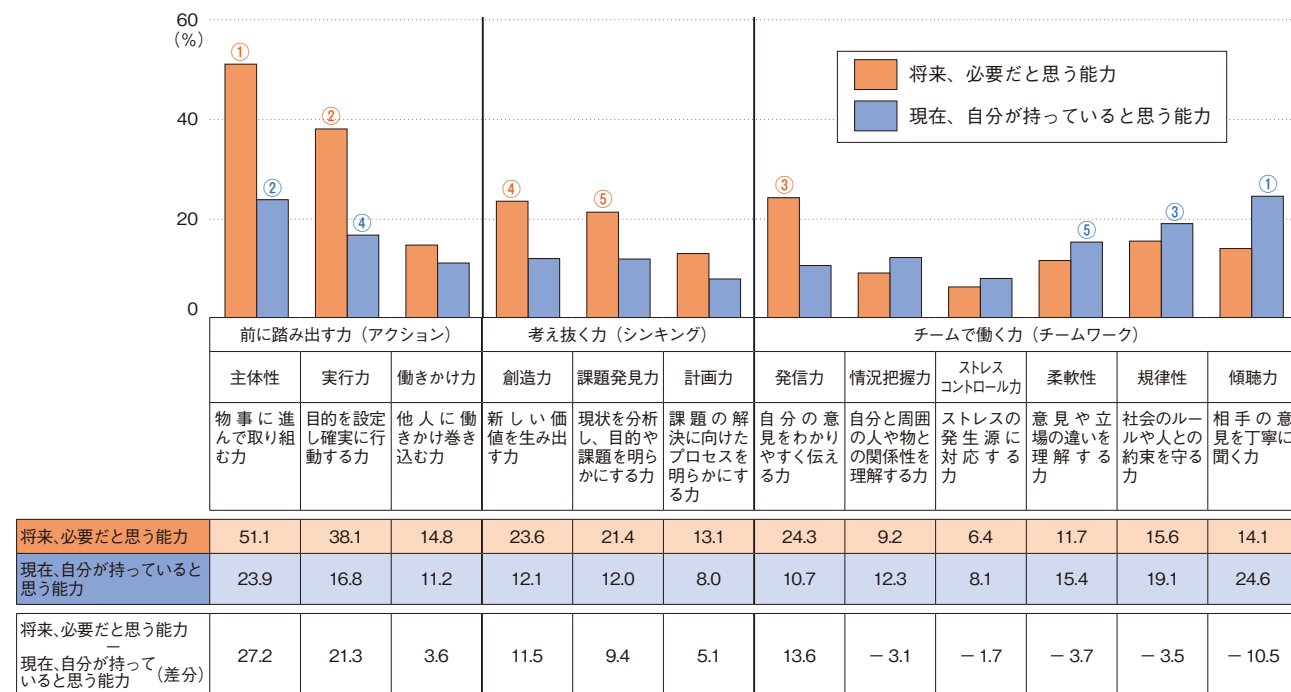
将来必要だが、現在持っていない能力は「主体性」「実行力」

経産省が定義する『社会人12の基礎力』の項目に合わせ、「将来必要だと思える能力」と「現在持っている能力」を問うた(図表8)。「傾聴力」や「規律性」など『チームワーク』は現在持っており強く、「主体性」や「実行

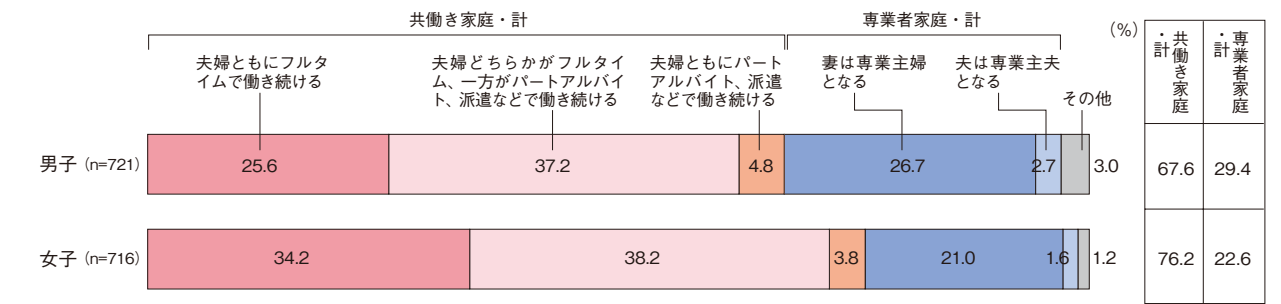
力」などの『アクション』する力は将来必要だが、現在は持っておらず弱く感じていることが分かった。

現在文科省中心に議論が進む高大接続改革においてはまさしく「主体性」をこれからの時代に必要な力として重視しているが、高校生自身が考える課題感とも一致しており改革の推進に期待したい。

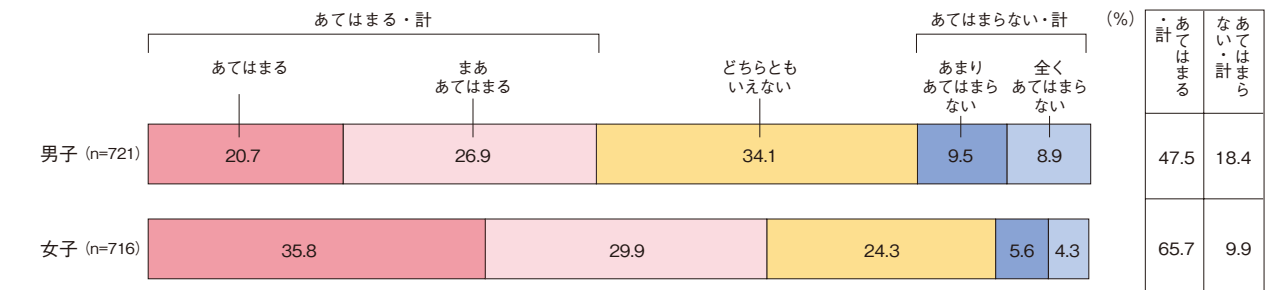
図表8 将来社会で働くにあたり、必要だと思う能力と現在持っている能力(3つまで回答)



図表9 高校生の理想の家庭像



図表10 結婚・出産しても働き続けて欲しい(男子)、働き続けたい(女子)



図表11 将来、結婚・出産しても働き続けて欲しい理由(男子)(複数回答)

順位	理由	(%)
1位	夫婦どちらかの収入だけでは生活することが難しそうだから	47.9
2位	家庭だけでなく、社会とのつながりを持ち続けてほしいから	36.1
3位	仕事にやりがいを感じられると思うから	32.9
4位	家事と子育てだけだと息がつかまると思うから	23.4
5位	経済的に自立してほしいから	18.4
6位	自分のお小遣いは自分で稼いでほしいから	11.8
7位	自分の母親が働いているから	4.8
8位	親に言われているから	0.6

図表12 将来、結婚・出産しても働き続けたい理由(女子)(複数回答)

順位	理由	(%)
1位	仕事にやりがいを感じられると思うから	52.0
2位	夫婦どちらかの収入だけでは生活することが難しそうだから	48.6
3位	経済的に自立しておきたいから	48.4
4位	自分で自由に使えるお小遣いが欲しいから	43.1
5位	家庭だけでなく、社会とのつながりを持ち続けたいから	35.9
6位	家事と子育てだけだと息がつかまりそうだから	25.0
7位	自分の母親が働いているから	13.0
8位	親に言われているから	1.8

女子高生は76%であったことを鑑みると、多くの共働き志向の女子高生は、結婚・出産しても仕事を辞めず長く働き続けたい、『ロングキャリア志向』を持っていると言えるのではないだろうか。

一方、働き続けて欲しいと考える男子高生は48%と女子より18ポイント低かったが、昨年の3割と比べると大幅に増加しており、男子の家庭観に変化の兆しが見られた(2014年男子「働き続けて欲しい」29%)。

その理由を男女別にみると(図表11-12)、男子の働き続けてほしい理由1位は「夫婦どちらかの収入だけでは生活することが難しそうだから」(48%)、2位「家庭だけでなく、社会とのつながりを持ち続けてほしいから」(36%)。女子の働き続けたい理由1位は「仕事にやりがいを感じられると思うから」(52%)、2位「夫婦どちらかの収入だけでは生活することが難しそうだから」(49%)。男女ともに「経済的な理由」は高いポイ

ントとなったものの、女子は「仕事のやりがい」が「経済的理由」を上回った。

背景としては、小学生時からのキャリア教育や「働く母親」の影響に加えて、2015年成立した「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律(女性活躍推進法)」の影響を挙げ女子高生もおり、社会環境の変化がキャリア観形成に関係があることが推測される。

高校生の結婚観・家庭観 共働きが理想の家庭像であり、家族を1番大切にしたい。

共働きが「理想の家庭」は、男子68%、女子76%

共働き家庭を理想とする高校生を男女別にみると、女子のほうが男子より8ポイント高かった(図表9)。また共働き家庭の働き方を男女別にみると、「夫婦どちらかがフルタイム」

はほぼ同ポイントなのに対して、「夫婦ともにフルタイム」は女子のほうが9ポイント高く、34%であった。

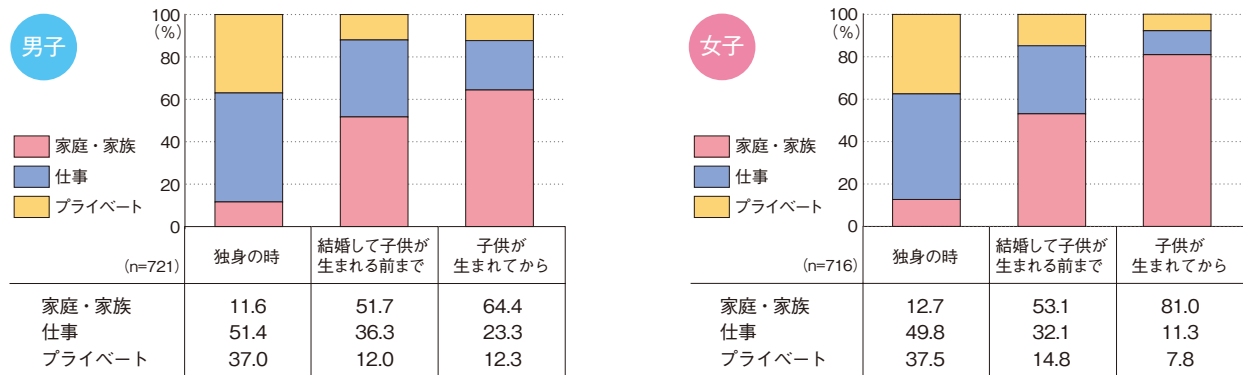
現在の高校生が産まれた頃から、共働き世帯が専業主婦世帯を上回っており、本調査においても母親の有職率は72%であったことから、母親が働いている姿を身近に見てきた

ことが、彼ら彼女らの家庭観に影響を与えていると考えられる。

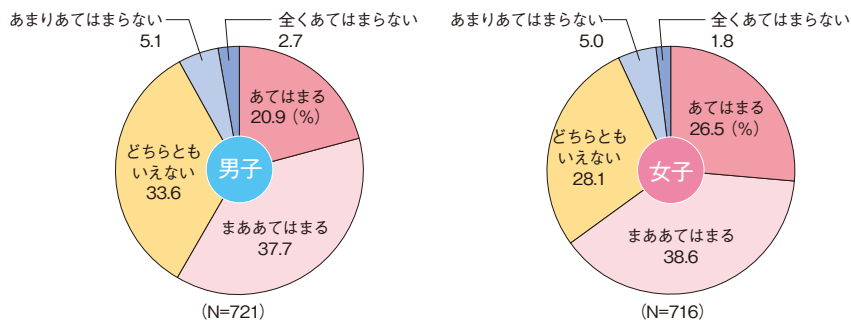
結婚・出産しても働き続けたい女子高生は66%

将来、結婚・出産しても働き続けたいと考える女子高生は66%(図表10)。前段、共働き家庭を理想とする

図表 13 「独身の時」「結婚して子供が生まれる前まで」「子供が生まれてから」最も大切にしたいこと



図表 14 結婚相手が、家事や育児ができること(手伝ってくれること)を重視するか



結婚して子どもが生まれてからは、『家庭・家族』を最も大切にしたい男子高生は64%、女子高生は81%

独身の時、結婚して子供が生まれる前まで、子供が生まれてから、それぞれの時期における、『仕事』『家庭・家族』『プライベート』のうち最も大切にしたいことを問うた(図表13)。

独身時は、男女ともそれぞれ1位は『仕事』、続いて『プライベート』『家庭・家族』という順番で、ポイントも最大1.6ポイント差とほぼ同じであった。

結婚して子供が生まれる前までは、男女共に優先順位は同じで、1位『家庭・家族』、次いで『仕事』『プライベート』の順であった。男女とも1位

の『家庭・家族』割合は半数を超える。社会環境の変化に伴い、男子高生は家庭人としての役割を求められていると感じ取っているようだ。

子供が生まれてからも、1位『家庭・家族』、2位『仕事』、3位『プライベート』の順位は変わらないが、『家庭・家族』は女子(81%)に対して男子(64%)、『仕事』は男子(23%)に対して女子(11%)と、置かれた環境においてそれぞれの役割を明確に意識しているポイント差が表れる結果となった。

共働き家庭を理想とし、結婚後は『家庭・家族』を1番大切にしたいと考える高校生に、結婚相手が家事・育児できることを重視するか、を問うと(図表14)、男子59%、女子65%で男

女ともに半数以上が、家庭内で夫婦協働を求める傾向が見られた。

これらのデータから、ワークライフバランスを重視した彼らの価値観が浮かび上がってくる。結婚や出産という環境変化に合わせて、『家庭・家族』を優先しながら、『仕事』『プライベート』とのバランスを取ることが、将来、意欲的かつ前向きに働き、生活を営むためには重要と感じているようだ。

今回の調査を通じて、自分自身と社会の未来は明るく将来展望は回復してきている傾向が見られた。これに伴い、チャレンジ志向の上昇も見受けられるが、引き続き安定を志向する高校生も多く、自分の思いと安定の“バランス”を重視している。社会に出てからの働き方や結婚観にもワークライフバランスを強く意識した価値観が強まっている。教育現場においても、彼らの「今」から繋がる将来(「進学」→「働き方」→「結婚・家庭」)をイメージできるようなコミュニケーションの重要性がさらに高まっていくだろう。